

[論文]

友人に対する「冗談関係の認知」の 正確性の検討（1）

葉山大地

- 〈目次〉
1. 問題と目的
 2. 方法
 3. 結果
 4. 考察

1. 問題と目的

冗談関係 (joking relationship) とは、人類学者である Radcliffe-Brown (1940/1952) がアフリカの未開文化に関して提唱した概念であり、「他の人を冷やかしたり、からかったりし、そのからかわれた方はそれに対して何ら立腹してはならないという二者間の関係」と定義される。冗談関係は、結婚によって結ばれた姻族間や敵対する部族間といった衝突する可能性を秘めた社会的関係において頻繁に見られる。冗談関係について Radcliffe-Brown (1940/1952) は、世界各地に存在する、親族間で夫が妻の兄弟をひやかしたり、無礼に振る舞うことが許されている社会を紹介している。例えば、ナマ・ホッテントット族 (Nama·Hottentots) では、おいとおじがお互いの畜群の中から家畜を一匹ずつ奪い合うという冗談関係を紹介している。また、江口 (1979) は北部カメルーンに住むフルベ族とカヌリ族の間に成立する冗談関係を観察している。

Radcliffe-Brown (1940/1952) の定義や現象は、アフリカの未開文化という限定された概念であったが、Bradney (1957) は、デパートの店員の観察を行い、欧米社会における冗談関係は Radcliffe-Brown (1940/1952) の報告した冗談関係よりも冗談の内容や形式が多様であると述べている。この点について、Fine (1983) も、冗談関係は親族や民族間に限らず、友人や仕事仲間の間でも頻繁に見られるものであると述べている。Apte (1985) は冗談関係を“お互いに特別な親族関係や他の社会的結束を認め合う二者間で起こるパターン化された遊戯的行動”と再定義し、多様な文化や集団に適用できると論じた。さらに Norrick (1994) は、両者の間で行われる発言が遊びであるというメタコミュニケーションを共有する関係を「習慣的冗談関係」と呼び、友人間でも形成されるものであるとした。冗談を言い合うという行為は、多くの友人関係の中で行われている活動であり、相手との関係の深化や維持に重要な役割を果たす。

葉山・櫻井 (2008a, 2008b) は、関係スキーマ (Baldwin, 1992; Planalp, 1985) の観点から、「冗談関係の認知」として概念化し、実証的研究を行っている。関係スキーマは、過去の経験に基づく抽象的な知識によって構成され、対人的な期待を形成し、その後の行動に影響を及ぼすことが指摘されている (Baldwin, 1992; Planalp, 1987)。関係スキーマとは、お互いの関係についての知識の枠組みであり、冗談関係の認知は、相手との関係を「真面目なコミュニケーションだけでなく、お互いに冗談を言い合える関係」と認知することと定義される。特に、相手の冗談の好みを理解できているという「冗談に関する他者理解感」と冗談が行き過ぎても許してもらえるという「冗談に対する被受容感」から構成されている。葉山・櫻井 (2008a) は、友人に対する冗談行動への影響を検討している。その結果、他者理解感は多くの冗談行動を促進することが明らかとなった。また、被受容感は攻撃的な冗談行動を促進する一方で、他者高揚的冗談を言う頻度を低下させることが示された。さらに、葉山・櫻井 (2008b) は、過激な冗談の親和的意図が伝わるという話し手の期待の形成プロセスにおける冗談関係の認知の役割について検討を行っている。

また、葉山・櫻井 (2010a) では、聞き手としての冗談関係の認知に関する項目として「冗談に関する被理解感」(冗談の好みについて相手から理解されているという感覚) と「冗談に関する受容感」(相手から過激な冗談を言われても許してあげる感覚) が作成され、友人関係の形成について検討が行われている。その結果、冗談を言い合うという行動を通して、自分の冗談の好みを理解して自分の好みに合った冗談を言ってくれる相手に対して、親しさを感じ、信頼感を持つ一方、他者を理解することで信頼感や心理的重なりが促進されることを明らかにしている。

冗談関係の認知が形成されることは、友人関係において重要な役割を果たす一方で、その正確性は問題となる。なぜならば、関係スキーマは、相手の反応によって形成される特徴があるため、冗談においても相手が作り笑いなどをして誤った反応を話し手に返している場合が想定されるためである。

本研究の目的は、冗談関係の認知の正確性を、友人同士のペアを対象とした質問紙調査を用いて検討することである。具体的には、一方の回答者が形成する「話し手としての冗談関係の認知」と、他方の回答者が形成する「聞き手としての冗談関係の認知」の関連を検討する。すなわち、一方の回答者が形成している理解感や被受容感に対応する項目として、相手から理解されているという「冗談に関する被理解感」と、相手の冗談が行きすぎても許すという「冗談に対する受容感」に関する項目について、友人同士のペア内における変数の関連を検討する。

冗談関係が相手との関係を適切に反映しているのであれば、一方の個人が相手に対して理解感や被受容感を形成している場合、相手は理解されているという感覚（被理解感）や相手を受け入れている感覚（受容感）を有すると想定することが可能であり、これらの変数に正の関連がみられると予測される。

2. 方法

研究対象者 大学生の同性の友人同士のペア37組74名（平均年齢21.39歳、SD=1.19）であった。

調査内容 回答者に対して以下の質問に回答するよう求めた。

(a) 話し手としての冗談関係の認知に関する項目：葉山・櫻井（2008a）に基づき、葉山・櫻井（2010a）で修正された「冗談に関する他者理解感」（項目例：○○がどんな種類の冗談が好きか理解できている）と「冗談に対する被受容感」（項目例：行き過ぎた冗談であっても○○は怒らないで聞いてくれる）に関する項目を使用した。回答は、「全く当てはまらない（1）」、「あまり当てはまらない」、「どちらとも言えない（3）」、「少し当てはまる（4）」、「非常に当てはまる（5）」の5件法であった。

(b) 聞き手としての冗談関係の認知に関する項目：葉山・櫻井（2010a）によって作成された、「冗談に関する被理解感」（項目例：○○がどんな種類の冗

談が好きか理解できている)と「冗談に対する受容感」(項目例:少し行き過ぎた冗談であっても私は怒らないで聞いてあげる)に関する項目を各5項目ずつ作成した。回答は、「全く当てはまらない(1)」～「非常に当てはまる(5)」の5件法であった。

手続き 両者は同一実験室において、質問紙に回答した。その際、両者の間は衝立(高さ70cm×横100cm)を用い、お互いの回答が見えないよう配慮した。また、回答したくなくなった場合は回答を中断してよい旨を伝えた。

3. 結果

話し手としての冗談関係の認知の因子構造 話し手としての冗談関係の認知を測定する項目の因子分析(主因子法, promax 回転)を行った結果、2因子構造となった(Table 1)。第1因子は「少し冗談が行きすぎても〇〇は許してくれる」、「行き過ぎた冗談であっても〇〇は怒らないで聞いてくれる」といった項目が高い負荷を示したため、「冗談に対する被受容感(以下、被受容感)」と命名した。第2因子は、「どんな話題を冗談にすれば〇〇が笑う

Table 1 話し手としての冗談関係の認知に関する項目

	因子		平均(SD)
	1	2	
第1因子：冗談に対する被受容感			
少し冗談が行き過ぎてしまっても〇〇は許してくれる	.99	-.15	3.82(0.82)
行き過ぎた冗談であっても〇〇は怒らないで聞いてくれる	.85	-.02	3.84(0.84)
多少ひどい冗談を言ってしまうても〇〇から許してもらえる	.81	.02	3.62(0.79)
少し過激な冗談であっても〇〇は笑って聞き流してくれる	.72	.11	4.08(0.77)
どんな冗談を言っても〇〇から嫌われる心配がない	.62	.14	4.09(0.80)
第2因子：冗談に関する他者理解感			
どんな話題を冗談にすれば〇〇が笑うか理解できている	.02	.83	3.53(0.83)
〇〇がどんな種類の冗談が好きか理解できている	-.03	.75	3.41(1.01)
〇〇の笑いのツボを理解できている	.00	.75	3.42(0.95)
〇〇と共有している経験をネタにした冗談が言える	.08	.65	4.23(1.04)
〇〇の気分によって話す冗談を変えることができる	-.03	.55	3.58(0.86)
因子間相関	-	.45	

か理解できている」,「〇〇がどんな種類の冗談が好きか理解できている」という項目が高い負荷を示したため,「冗談に関する他者理解感(以下,理解感)」と命名した。

各因子に負荷した5項目を用いて a 係数をそれぞれ算出した結果, $a = .91$ と $.85$ となり,内の一貫性が確認されたと判断した。以上より,各因子に負荷を示した項目の得点を加算し,項目数で除したものを下位尺度得点とした。なお,「〇〇と共有している経験をネタにした冗談が言える」という項目が天井効果を示したが,分析に含めることとした。

聞き手としての冗談関係の認知の因子構造 次に,聞き手としての冗談関係の認知を測定する項目を用いて,因子分析(主因子法, promax 回転)を行った結果,2因子構造が得られた(Table 2)。第1因子は,「少し行きすぎた冗談であっても,私は怒らないで聞いてあげる」,「〇〇の冗談が行きすぎてしまっても,私は許してあげる」といった項目が高い負荷を示したため,「冗談に関する被理解感(以下,被理解感)」と命名した。第2因子は「〇〇はどんな話題を冗談にすれば,私が笑うか理解できている」,「〇〇は,私がどんな種類の冗談が好きか理解できている」という項目が高い負荷を示した

Table 2 聞き手としての冗談関係の認知に関する項目

	因子		平均(SD)
	1	2	
第1因子：冗談に対する受容感			
少し行き過ぎた冗談であっても,私は怒らないで聞いてあげる	.87	-.03	4.03 (0.72)
〇〇の冗談が行き過ぎてしまっても私は許してあげる	.87	-.11	4.07 (0.71)
〇〇が少し過激な冗談を言っても私は笑って聞き流してあげる	.82	.03	4.08 (0.77)
〇〇が多少ひどい冗談を言っても私は許してあげる	.79	.05	4.07 (0.75)
〇〇がどんな冗談を言っても〇〇を嫌いになることはない	.44	.26	4.09 (0.80)
第2因子：冗談に関する被理解感			
〇〇はどんな話題を冗談にすれば私が笑うか理解できている	-.01	.83	3.49 (0.94)
〇〇は,私がどんな種類の冗談が好きか理解できている	.00	.83	3.45 (0.95)
〇〇は,私の笑いのツボを理解できている	.02	.74	3.50 (0.86)
〇〇は,私の気分によって話す冗談を変えることができる	-.05	.71	3.54 (0.97)
〇〇は,私と共有している経験をネタにした冗談が言える	.06	.60	4.15 (0.96)
因子間相関	-	.45	

ため「冗談に対する他者受容感（以下、受容感）」と命名した。

各因子に負荷した項目の α 係数を求めた結果、 $\alpha = .86$ と $.79$ となり、内的一貫性が確認された。以上より、各因子に負荷を示した項目の得点を加算し、項目数で除したものを下位尺度得点とした。なお、「○○は、私と共有している経験をネタにした冗談が言える」という項目が天井効果を示したが、分析に含めることとした。

冗談関係の認知の基礎統計量 話し手としての冗談関係の認知と聞き手としての冗談関係の認知に関して、それぞれ平均値 (SD) を算出した (Table 3)。 α 係数は各変数において $0.79 \sim 0.91$ の値を示し、十分であると判断された。

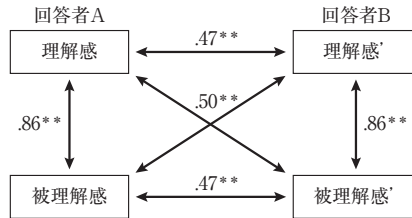
冗談関係の認知のペア間の関連の検討 話し手としての冗談関係の認知に関する 2 下位尺度（他者理解感、被受容感）と、聞き手としての冗談関係の認知に関する 2 下位尺度（被理解感、他者受容感）に関して、相関を算出した。その際、ペアワイズ・アプローチに基づき、包括的相関、ペアワイズ級内相関、クロス級内相関をそれぞれ算出した。友人関係のように、相互作用を日常的に行う関係においては、その両者間の変数は相互に影響しあい、変数の得点が類似する可能性が想定される。ペアワイズ・アプローチ (Gonzalez & Griffin, 2000 大坊・和田訳, 2004) とは、二者間のデータを扱う際に、変数の相互依存性を考慮して相関を算出する手法である。ペアワイズ・アプローチにおいては、単一変数（一方の回答者の変数 x と他方の回答者の変数 x' ）に対する二者関係内の類似性を検討する際には、ペアワイズ級内相関が用い

Table 3 冗談関係の認知の基礎統計量

	α 係数	平均値	SD
【話し手としての冗談関係の認知】			
冗談に関する他者理解感	0.85	3.29	0.72
冗談に対する被受容感	0.91	3.18	0.72
【聞き手としての冗談関係の認知】			
冗談に関する被理解感	0.86	3.15	0.69
冗談に対する受容感	0.79	3.57	0.82

られる。また、異なる2つの変数（一方の回答者の変数 x と他方の回答者の変数 y ）に関する二者関係内の類似性を検討する際には、クロス級内相関が用いられる。また、個人内における単一変数間の類似性を検討する際には、包括的相関が用いられる。本研究においては、冗談行動に関する自己評定 (x) と相手が行う他者評定 (y) という異なる2つの変数間の相関を求めするため、クロス級内相関を使用する。

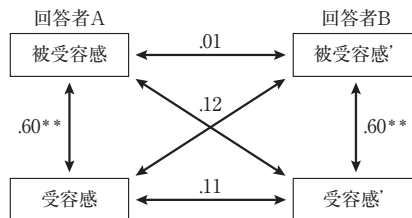
その結果、同一の回答者内における他者理解感と被理解感の包括的相関は、 $r = .86$ ($p < .05$) となり、回答者 A と回答者 B の他者理解感のペアワイズ級内相関は $r = .47$ ($p < .05$) となった (Figure 1)。また、一方の回答者 A の他者理解感と、他方の回答者 B の被理解感のクロス級内相関は $r = .50$ ($p < .05$) となり、中程度の有意な相関がみられた。



注) 図中の数字は相関係数を表す。** $p < .01$

注) カンマ (') が付いているのはもう一方の回答者 B の変数であることを意味する。

Figure 1 理解感と被理解感の相関関係のまとめ



注) 図中の数字は相関係数を表す。** $p < .01$

注) カンマ (') が付いているのはもう一方の回答者 B の変数であることを意味する。

Figure 2 被受容感と受容感の相関関係のまとめ

回答者内における被受容感と受容感の包括的相関は、 $r = .60$ ($p < .05$) となった (Figure 2)。回答者 A と回答者 B の被受容感と受容感のペアワイズ級内相関はそれぞれ無相関 ($r = .01, .11$) となった。また、一方の回答者 A の被受容感と、他方の回答者 B の受容感のクロス級内相関は $r = .12$ となり、有意ではなかった。

4. 考察

本研究の目的は、葉山・櫻井 (2008a) が作成した「他者理解感」および「被受容感」という冗談関係の認知の対となる概念として、葉山・櫻井 (2010a) が作成した聞き手としての冗談関係の認知である「被理解感」と「受容感」を取り上げ、両者における変数の関連を検討することであった。友人同士をペアにした調査を行い、ペアワイズ・アプローチ (Gonzalez & Griffin, 2000 大坊・和田訳 2004) に基づき分析を行った結果、一方の回答者が有する他者理解感、もう一方の回答者が有する被理解感と中程度の相関がみられた。この結果より、一方が相手を理解しているという感覚を形成するほど、相手も理解されていると感じる傾向があることが示されたことから、相手が形成する関係認知という主観的な指標においては、他者理解感は正確であると考えられる。

その一方、被受容感は有意なペアワイズ級内相関がみられず、一方の回答者が、冗談がいきすぎても許してもらえるという感覚を形成しても、もう一方が、許してあげるといふ感覚を形成しているわけではないことが示された。この結果より、被受容感二者間の関係性を的確に反映していないことが明らかとなった。個人内の被受容感と受容感の相関 (包括的相関) は、中程度の正の相関を示しているため、自分が許してもらえる程度と自分が許す程度は関連している一方、その水準は、2者間で一致しないことを意味する。

なぜ被受容感は両者において一致しないのであろうか。上記の結果について

ては、以下のように考察される。これらの結果は、他者理解感と被受容感の関係スキーマとしての形成の困難さに基づいている可能性が考えられる。他者理解感は、日常生活における相互作用において、他者が笑ったり、笑わなかったりすることによって適宜修正を行っていくことが可能である。その点において、日常会話の中で、他者理解感を形成していくことは容易であるといえる。一方、被受容感は、日常生活において形成するのがやや難しいと推測される。なぜならば、被受容感は、自身が行きすぎた冗談を言ってしまった状況において、相手から許してもらうという相互作用が必要となるためである。ただし、葉山・櫻井(2010b)で明らかにされているように、状況によっては、冗談に怒りを感じたとしても愛想笑いや作り笑いをして、自分の気持ちを相手に伝えない場合もある。被受容感に関しては、得点は低くはないため、直接的に関連がある経験をしてなくても、推測によって形成されている側面があるかもしれない。たとえば、同一個人の中での受容感(相手を許すという認知)と被受容感(相手から許されるだろうという認知)は中程度の正の相関があるため、「自分が許すのだから相手も許してくれるだろう」という自己中心的な推測が想定される。その意味において、被受容感は、仮想的に形成される部分がある可能性が想定される。こうした点はさらに検討することが求められる。

今回は、質問紙において相互に想定をして回答するというペア研究を行ったが、冗談関係の認知の正確性を検討するためには、実際に友人同士のペアに対して、実験者が用意したいくつかの冗談刺激を同時に呈示し、相手が好む冗談をひとつ選択させるという実験を行うことが望ましい。そうした実験を通して、冗談関係の認知の正確性を正答数という客観的な指標の観点から検討するといった方法が必要であろう。

[引用文献]

Apte, M.L. (1985). *Humor and laughter: an anthropological approach*. New York: Cornell University Press.

- Baldwin, W.M. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Bradney, P. (1957). The joking relationship in industry. *Human Relations*, **10**, 179-187.
- 江口一久 (1979). 冗談関係にあるもののあいだでかわされる冗談 ——北部カメルーン・フルベ族の場合—— 国立民族学博物館研究報告, **20**, 647-669.
- Fine, G.A. (1983). Sociological approaches to the study of humor. In P. E. McGhee & J.H. Goldstein (Eds.), *Handbook of humor research Volume 1 Basic issues*. Springer-Verlag New York Inc. pp.159-182.
- Gonzalez, R., & Griffin, D. (2000). 相互依存性についての統計学——二者間データの慎重な取り扱い (大坊郁夫・和田実 (監訳) (2004). パーソナルな関係の社会心理学 北大路書房 pp.221-255.)
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008a). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79**, 18-26.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008b). 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究, **56**, 23-34.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2010a). 友人関係初期における冗談関係の認知の役割 筑波大学心理学研究, **40**, 35-41.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2010b). 冗談に怒りを感じた場面における聞き手の反応を規定する要因の検討 ——拒否に対する感受性, 話し手との関係性, 周囲の反応に着目して—— 教育心理学研究, **58**, 393-403.
- Norrick, N.R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics*, **22**, 409-430.
- Planalp, S. (1985). Relational schemata a test of alternative forms of relational knowledge as guides to communication. *Human Communication Research*, **12**, 3-29.
- Radcliff-Brown, A.R. (1940/1952). *Structure and function in primitive society* (ラドクリフブラウン, A.R. 青柳まちこ・蒲尾正夫 (訳) 未開社会における構造と機能 (1975). 新泉社)